上野通明さん（チェロ）応援レポート

郷愁の響き　ドヴォルザーク「新世界」より

2017年12月2日（土）15:00開演

狛江エコルマホール

上野さんが「一生弾き続けたい、大好きなドヴォコン」というドヴォルザークのチェロ協奏曲ロ短調Op.104。「そうかチェロは手で弾くものではなく、心と身体全体で弾くものなんだ。」と改めて思わされた上野さんの演奏は、チェロが身体の一部となり、溶け合っている感じ。弾いているというより頭の先から足の先まで使って表現している。まさに渾身の演奏だった。

ドヴォルザークの深く郷愁を感じさせる曲と、オケの素晴らしい演奏、そしてチェロと一体となった上野さんの渾身の演奏。深く心に響く演奏だった。

＜演奏会概要＞

◆出演者
原田慶太楼／指揮
東京フィルハーモニー交響楽団
上野通明／チェロ

◆プログラム
ドヴォルザーク：スラブ舞曲第１番op.46-1
チェロ協奏曲ロ短調op.104
交響曲第９番ホ短調op.95「新世界より」

◆アンコール曲
チェロ独奏
J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲第3番より　ブーレ
オーケストラ
ドヴォルザーク：ユーモレスク

（当日のリハーサルの様子　狛江エコルマホール様より）

（当日のフライヤー）

Q&A

1995年生まれ、弱冠22歳の上野さんだが、これまでに数々のコンクールで素晴らしい成績を収め、国内外のオーケストラとの共演も多い。ドイツ、デュッセルドルフ音楽大学へ留学し、公私ともに多くの刺激を受け、新たな経験を積んでいる。すごい勢いで成長を続ける上野さん。普段は寡黙な普通の青年に見えるが、内に秘めた強い思い、信念があると思われる。それを探ってみたいと思い、質問を投げかけてみた。ぜひお読みください。

Q1.　チェロを弾くようになったきっかけは何だったのでしょうか。上野さんにとってチェロの魅力は何ですか。

A1. ヨーヨーマの「Inspired by Bach」というビデオを観て、自分は絶対この楽器をやりたいと思いました。チェロの魅力は音域が広く、その音色が一番人の声に似ていると言われるせいか、自分の中にある歌や心が僕にとっては一番そのまま表現できる手段です。

（当日のリハーサルの様子　狛江エコルマホール様より）

Q2.. ドイツで勉強していらっしゃいますが、ドイツで生活し、勉強することの意義は何でしょうか。

A2. ドイツの作曲家たちが昔実際に住んで生活していた場所で勉強し、文化に触れ、同じ景色を見たり同じ空気を吸ったりしてインスピレーションを受けることは自分にとってはとても大切な事です。

Q3. 音楽から離れて、気分転換したいと思う時はありますか。そういう時は何をされますか。

A3. 気分転換は映画鑑賞、ペーパークラフトなどです。

（指揮者の原田慶太楼氏と）

Q4. チェロの演奏には、ソロや室内楽、協奏曲等、いろいろありますが、どの演奏形式がお好きですか。チェロ協奏曲のソリストとして演奏することの楽しさ、喜び、難しさは何ですか。

A4. どの演奏形態にもそれぞれ違った楽しみや喜びがありますが、僕は一番気持ちが良いのはコンチェルトです。オーケストラの音楽自体でもとてもスケールが大きく音にも深みも幅も豊かさも存分に表現できるものですが、それと一体となって自分も大きなものを放つことができたと感じる時、最高の喜びを感じます。

また無伴奏もとても好きです。他の楽器との兼ね合いにも大きな喜びを得ることももちろんあるのですが、ソロ（無伴奏）にはそれがまったくなく、緊張感とすごい集中力が要求されますが、自分の独特の世界が作れたとき特別な喜びを感じます。

Q5. チェロ協奏曲の中でも、ドヴォルザークのチェロ協奏曲ロ短調op.104は名曲と言われ、聴いたことのない人はいないと思いますが、この曲が名曲と言われ、聴き継がれてきた理由はどこにあると思いますか。上野さんにとってこの曲はどんな存在ですか。

A5. 僕にとっていつ何度弾いても大好きなドヴォコンの魅力は話せばキリがありませんが、僕にとっての一番強く感じる魅力はこの作品が彼の個人的な思い、人間らしい苦悩や不安や希望や喜び、故郷への思い…そういった人間が感じ得る感情の全てがドヴォルザークの言葉を通して全編に渡っていっぱい詰まった曲だからかもしれません。

だからこそ、自分が人生のどんなときにあっても曲に共感し、様々に進化させることもできる作品だと思っています。

（演奏後の満足そうな上野さん）

Q6. 今回の演奏を経て、何か新しい発見はありましたか。今日の演奏を今後に活かすとしたら、どんな点でしょうか。

A6. 今回も、また違った指揮者、オーケストラの方々と共演させていただき、沢山の新しい発見が有りました。具体的に一つ一つは挙げませんが、曲の細かい解釈やボーイングなど、今後にぜひ活かしていきたいと思います。

Q7. 他のチェリストと差別化するとすると、どんな演奏家になりたいですか。そのためには今、何をするべきだとお考えですか。

A7. 演奏家にとって個性はとても大切なものだと思いますが、自分は自分が正しいと思う方法でただひたすら音や技術や感性を磨いてゆき、結果それが自分の個性として認識してもらえたらとても嬉しいです。

上野さんの回答を読み、強い個性と、表現することに対する喜びを感じた。「チェロは自分を表現するのに一番適した楽器。」「自分が正しいと思う方法でただひたすら音や技術や感性を磨いていく。」「自分独特の世界を創れた時、特別な喜びを感じる。」とのこと。これからも個性を磨き、自分にしかできない演奏で表現し、独特の世界を創っていってほしい。そんな上野さんの音楽を聴くのが楽しみだ。

（雪にけむるケルン大聖堂、ご本人より）

（ケルン大聖堂の前でのニューイヤー花火の様子、ご本人より）

フレッシュ名曲コンサート

郷愁の響き

～ ドヴォルザーク「新世界より」

原田慶太楼／指揮

上野通明／チェロ

東京フィルハーモニー交響楽団

KEITARO HARADA,conductor,
MICHIAKI UENO,cello
TOKYO PHILHARMONIC ORCHESTRA

2017. 12. 2(土) 15:00

狛江エコルマホール

主催:一般財団法人狛江市文化振興事業団
公益財団法人東京都歴史文化財団(東京文化会館)
企画協力:東京オーケストラ事業協同組合

公益財団法人東京都歴史文化財団(東京文化会館)では、都内の区市町村及び区市町村の指定する団体との共催により、「フレッシュ名曲コンサート」を実施しています。
この事業は、都民の皆様に身近な地域で気軽にクラシック音楽等の名曲に親しんでいただく機会を提供し、併せて新進音楽家の発掘、育成を図ることを目的として開催するものです。
皆さまのご支援とご協力をよろしくお願いいたします。
公益財団法人東京都歴史文化財団(東京文化会館)

出演者について

原田 慶太楼 Keitaro Harada ／ 指揮

2015年9月からアメリカのメジャー、シンシナティ交響楽団とシンシナティ・ポップス・オーケストラのアソシエイト・コンダクターという重要なポジションに就任した逸材。2010年タングルウッド音楽祭で小澤征爾フェロー賞、2013年ブルーノ・ワルター指揮者プレビュー賞、2014年・2015年米国ショルティ財団キャリア支援賞を連続受賞。現在の活動拠点であるアメリカでは、アリゾナ・オペラ、リッチモンド交響楽団のアソシエイト・ コンダクターおよび同ユースオーケストラ音楽監督などオペラやオーケストラ公演に活躍中。

1985年東京生まれ。17歳で単身渡米。インターラーケン芸術高校音楽科において、指揮をフレデリック・フェネルに師事。指揮法をロシアのサンクトペテルブルクで学び、2006年21歳のときにモスクワ交響楽団を指揮してデビュー。2011年ノースカロライナ・オペラにおいてオペラ・デビュー。これまでにロバート・スパノ、マイケル・ティルソン・トーマス、オリバー・ナッセン、ヘルベルト・ブロムシュテット、ステファン・アズベリーなどに師事。このほか写真家としても活躍中。

上野 通明 Michiaki Ueno ／ チェロ

パラグアイに生まれ、5歳よりチェロを始める。幼少期をスペインで過ごし、数々のコンクールで優勝または入賞。2009年13歳で第6回若い音楽家のためのチャイコフスキー国際音楽コンクール、日本人初の優勝。翌年、第6回ルーマニア国際音楽コンクール弦楽器部門最年少第1位。2014年、第21回ヨハネス ブラームス国際コンクールチェロ部門に優勝し話題となる。これまでに新日本フィル、東京フィル、東京交響楽団、ロシア交響楽団等国内外のオーケストラと多数共演。テレビ朝日「題名のない音楽会」、NHKBS「クラシック倶楽部」等に出演。故馬場省一、イニアキ・エチェバレ、毛利伯郎各氏に師事。桐朋学園大学音楽学部ソリスト・ディプロマコース全額免除特待生。現在デュッセルドルフ音楽大学にてピーター・ウィスペルウェイに師事し、ドイツ国内で演奏活動を始めつつ、更なる研鑽を積む。

宗次エンジェル基金、ロームミュージックファンデーション、第44回 江副記念財団奨学生。岩谷時子音楽文化振興財団より第1回Foundation for Youth、第6回 岩谷時子賞 奨励賞、2016年度第26回青山音楽賞新人賞受賞。

東京フィルハーモニー交響楽団 TOKYO PHILHARMONIC ORCHESTRA

1911年創立。2011年に日本のオーケストラとして最初の100周年を迎えた、日本で最も長い歴史をもつオーケストラ。メンバー約130名。シンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せもつ。名誉音楽監督にチョン・ミョンフン、首席指揮者にアンドレア・バッティストーニ、特別客演指揮者ミハイル・プレトニョフを擁する。Bunkamura オーチャードホール、東京オペラシティ コンサートホール、サントリーホールでの定期演奏会や「平日／休日の午後のコンサート」を中心とする自主公演、新国立劇場等でのオペラ・バレエ演奏、『NHK名曲アルバム』『NHKニューイヤーオペラコンサート』テレビ朝日系『題名のない音楽会』、テレビ東京系『東急ジルベスターコンサート』などの放送演奏により全国の音楽ファンに親しまれる存在として、高水準の演奏活動とさまざまな教育的活動を展開している。海外公演も積極的に行い、国内外から高い注目を集めている。1989年から Bunkamura オーチャードホールとフランチャイズ契約を結んでいる。東京都文京区、千葉県千葉市、長野県軽井沢町、新潟県長岡市と事業提携を結び、各地域との教育的、創造的な文化交流を行っている。

プログラム

ドヴォルザーク ： スラブ舞曲 第1番 作品46-1

： チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

Ⅰ Allegro

Ⅱ Adagio, ma non troppo

Ⅲ Finale: Allegro moderato

♪ 休憩 （ 20分 ）

ドヴォルザーク ： 交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界より」

Ⅰ Adagio – Allegro molto

Ⅱ Largo

Ⅲ Scherzo: Molto vivace

Ⅳ Allegro con fuoco

曲目について　H・S

チェコの美しいボヘミア地方の田舎町に生まれたアントニン・ドヴォルザーク(1841－1904)。家は肉屋と宿屋を営んでおり、音楽好きな父や伯父の影響でヴァイオリンを演奏するなど音楽的才能を持っていましたが、13歳の時に家を継ぐため親戚の肉屋に修業に出ます。しかし、そこで名教師と出会い、音楽家の道へ進みます。オーケストラのヴィオラ奏者や教会のオルガニストをしながら、地道な作曲活動をしていましたが、音楽家支援のための奨学金に応募したことがきっかけで、審査員委員をしていたブラームスにその才能を認められ、30歳後半でようやく作曲家として注目され、その後はチェコを代表する作曲家として国際的に活躍しました。

■ スラブ舞曲 第1番 作品46-1

ドヴォルザークの才能に注目していたブラームスは、自分の作品を出版していたジムロックという出版社にドヴォルザークを推薦。ジムロックはブラームスの人気作品、ハンガリー舞曲のような作品を書いて欲しいとドヴォルザークに依頼し、彼はピアノ連弾用作品として全8曲の舞曲集を作曲しました。1878年、楽譜が出版されるやいなや、大ヒットしすぐに管弦楽用に編曲され、これも人気となり、ドヴォルザークは36歳にしてやっと作曲家として名が知られるようになりました。このスラブ舞曲はフリアント、ソウセゾカ、スコチーなどのチェコの民族舞曲の特徴を自分の音楽に取り込んで作曲していて、実に生き生きとした魅力的な作品です。ちなみに1886年に続編として8曲書き、これもまた人気となりました。

この第1番はフリアントのスタイルで活発な曲です。勢いよく始まり、中間部での流れるよう陽気なメロディーが印象的。そして、熱狂的に終わります。

■ チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

この作品はチェロ協奏曲、いや、すべての協奏曲の中の、最高傑作のひとつと言えましょう。素晴らしいチェロの名技とオーケストラが一体となって音楽を作り上げいく様は、実に感動的でチェリストなら誰もが憧れる作品です。世界的な名声を得ていたドヴォルザークは、1892年、51歳の時にアメリカのニューヨーク・ナショナル音楽院に招かれます。3年ほど滞在することになりますが、この協奏曲は帰国直前の1894年から95年にかけて作曲されました。アメリカのルーツとも言える黒人音楽やインディアンの音楽に興味を持ち、熱心に研究をしていたドヴォルザークは、それらの音楽の精神を自分の音楽に取り込み、自分の中にあるチェコ民族としての熱い情熱とアメリカ音楽の持つ哀愁を合致させ、非常に劇的でスケールの大きいこの作品を生んだのです。

ちなみにこの作品には次のようなエピソードがあります。作曲中、ドヴォルザークの親密の人で妻の姉であったカウニッツ伯爵夫人が病気と知り、彼女が好きだった自分の歌曲を第2楽章に引用しました。しかし、作曲後に彼女が亡くなったことから葬儀の気持ちを込めたのでしょうか、第3楽章にも手を加えています。また、初演後には第3楽章の最後の部分をより効果的になるよう、更に書き換えています。

ほの暗く重い響きで始まり、徐々に熱を帯びて劇的になるオーケストラ。のどかなホルンの旋律に続き、幕が開き役者が現れるかのようにチェロが登場する第1楽章。切々とチェロが奏でる望郷の歌とも言える感傷的な第2楽章、そして、チェコの民族音楽風リズムに黒人霊歌風のメロディーがつけられた、ドヴォルザークならではの第3楽章からなります。

＊＊

■ 交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界より」

この作品はドヴォルザークの好奇心、探究心がなかったら生まれることはなかったでしょう。50歳を過ぎたドヴォルザークはすでにチェコを代表する作曲家で、プラハ音楽院の教授などの要職に就く安定した日々を送っていました。しかし、ニューヨークのナショナル音楽院の院長職への熱心な誘いを受け、意を決し1892年に家族と共にニューヨークへ旅立ち、熱狂的な歓迎を受けます。そして、アメリカに渡って最初に作曲した大作がこの交響曲でした。

さて、このナショナル音楽院は当時としては珍しく、人種差別のない教育を行っていたため、ドヴォルザークは黒人音楽やインディアンの音楽を身近に聞き、接することができ、彼らの音楽に共感しました。そして、大都会ニューヨークでの生活の中でアメリカのエネルギーを感じると同時に、美しい故郷ボヘミアへの郷愁を強く感じるようになり、それらがこの作品を貫く原動力となったのでしょう。ドヴォルザークは「もし、アメリカを見なかったらこの交響曲を書くことはなかっただろう」と述べています。1893年に作曲され、その年にカーネギー・ホールでニューヨーク・フィルハーモニックが初演、ドヴォルザークはこれまでに経験したことのない大成功を収めたのです。

物思いにふけるように静かに始まりますが、劇的に展開する活気のある第1楽章、〈家路〉のメロディーで有名な、郷愁あふれる第2楽章、インディアンの婚礼の宴での踊りを歌った詩からイメージして書いた第3楽章、そして、機関車が動きだす様子を音で表したようなユニークな冒頭(ドヴォルザークは鉄道マニアでした)に、各楽章で使われた旋律が次々に効果的に使われる、堂々とした第4楽章からなります。